

日本人大学生の中国に対する意識の変容 —国際交流プログラムへの参加を通して—

大連理工大学外国語学部講師 穆 紅
大連理工大学外国語学部准教授 孟 慶榮

要旨

本研究では、日本人大学生を対象に、国際交流プログラム参加前後に訪問国の中国・中国人に対する意識に変化が見られるかを分析した。その結果、国際交流プログラムの参加前において、中国に対してはやや明るく親しみやすいという側面と、やや好戦的で男性的という側面のイメージを抱いており、中国人に対してはやや社会的で開放的、やや親切で親しみやすいというイメージを抱いている傾向が見られた。一方、国際交流プログラムの参加後において、中国に対するイメージの中で、やや好戦的で男性的という硬い一面のイメージが中立的になっており、中国人に対するやや親切で親しみやすいというイメージがさらに強まる傾向にあることが示された。日本人大学生が書いた振り返りレポートを見ると、実際に現地の人々と交流する中で、中国に対して持っていた考えは単なる自分の偏見にすぎないということを実感し、現地での交流の重要性を再確認したと強調していることがわかった。

1. はじめに

昨今、世界のグローバル化が進む一方、日本人の海外留学者数が急減してきている。文部科学省による「日本人の海外留学者数」の調査^(注1)によると、2011年度統計では、海外の大学などに留学した日本人は2004年より7年連続して減少し、5万7,501人となったことが報告されている。ピーク時である2004年(8万2,945人)と比べ、約30%(2万5,444人)の減少となっている。大学などの教育機関では、単位取得のために外国語を学んでも海外に興味関心を示さず、留学に対する意欲も見られない大学生が多くいることが指摘されている。

そこで、日本人大学生の国際理解教育を行い、異文化体験のチャンスを提供するために、さまざまな国際交流プログラムが行われるようになってきた。国際交流プログラムの実施によって、日本人大学生の語学力の向上のみでなく異文化に触れることによって、他国に対する関心度を高め、国際理解について自分なりの理解を形成することが望ましい。それでは、実際に国際交流プログラムに参加することによって、他国に対する理解に変容が見られるのだろうか。

本研究では、国際交流プログラムに参加した日本人大学生が訪問国の中国や中国人に対してどのような意識を持っているか、変容が見られるかを探りたい。中国に着目する理由は、中国は日本の隣国であり政治や文化、経済など様々な分野において中日交流が盛んに行われており、さらに日本人の海外留学者数の多い国の中で、中国が2位(1万7,961人)になっているように、近年中国に対する関心が高まっていることによる。

2. 先行研究

日本人大学生や高校生を対象に国際交流や外国人に対するイメージについて調査を行った研究には、山田（2011a, 2011b）、御堂岡（1982）、相川（2007）などが挙げられる。

まず、山田（2011a）では、日本人大学生が国際交流や外国人に対して抱いているイメージ構造を PAC 分析調査^(注2)によって分析した。調査対象者は2名であり、留学経験がなく、留学生との接触もほとんどなかった。分析の結果、国際交流や外国人に対するイメージについて、2名の対象者とも「恐怖感」や「距離感」に象徴される負のイメージ、「自己の成長」や「新しいことへ繋がる」など正のイメージ、「架空の外国人」の3つの部分から構成されていることが示されている。そして、負のイメージは、国際交流や外国人との十分な接触体験がなかったため、残っている部分であり、その壁を乗り越えることが自分たちの成長へとつながると推察されている。このような学生に対して、先入観を取り除くだけの十分な接触体験と、興味を持続させられる継続的な交流の場の確保が必要であり、更に躊躇している第一歩を後押しできるようなプログラムデザインも有効だと指摘されている。

この研究を踏まえて、山田（2011a）の2名の対象者が留学生との協働授業「アカデミック・プレゼンテーション」を受講した後、山田（2011b）は2回目の PAC 分析調査を実施し、対象者2名の受講前後の意識にどのような変化が見られるかを分析した。その結果、対象者2名ともに1回目よりも2回目の結果の方が、回答にポジティブな傾向が見られた。これは、メディアを通して形成された抽象的な外国人や国際交流のイメージから、自分の文脈で交流を捉えられるようになった変化であり、学生自身の中に具体的な価値基準が芽生え始めたからだと述べている。

次に、実際に海外の修学旅行に参加した高校生を対象として訪問国に対する意識について分析した研究を見てみる。御堂岡（1982）は、「修学旅行で直接接触を経験することによって、知識・関心は増大し態度は好意的になりイメージもよくなるだろう」という仮説を検証するために、韓国への修学旅行に参加した生徒と不参加の生徒を対象に、旅行前後2回の質問紙調査を実施して分析を行った。結果として、修学旅行に参加した生徒は韓国についての知識・関心が増大していると同時に態度は好意的になり、対韓イメージは良くなる傾向が示されている。

また、相川（2007）は、高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に、肯定的な影響を及ぼすかどうかを統制群との比較を通じて検討している。調査対象者は県立商業高校2年生、修学旅行先がシンガポールの参加群120名、不参加群122名であった。両群に対して、修学旅行の前後2回、シンガポールの国と人に対するイメージ調査、国際理解の程度を調べるアンケート調査を実施した。その結果、シンガポールの国と人に対するイメージは、非参加群では旅行前後でほとんど変化がなかったが、参加群は旅行後に実施した SD 尺度^(注3)項目の半分以上において有意な変化が示されている。また、国際理解度の変化に関しては、修学旅行前には参加群と不参加群に差がなかったが、旅行後には参加群において有意な変化が確認された。このような結果を踏まえて、海外の国や人に対する高校生のイメージや国際理解に肯定的な変化をもたらすような海外修学旅行のプログラムを構成することが必要だと述べている。

以上の研究から、大学生が留学生との協働授業の受講、高校生が海外修学旅行への参加後、

外国や外国人に対するイメージに変容が見られることがわかった。実際に、大学教育機関でも国際交流プログラムが多く実施され、訪問国に短期間滞在し異文化に触れることが多いが、国際交流プログラムに参加した日本人大学生は、訪問国に対するイメージに変容が見られるのだろうか。訪問国に対する意識の変化を調べることによって、国際交流プログラムのデザインや実施に対して参考になる手がかりを提供できると考える。

本研究では、国際交流プログラムに参加した日本人大学生を対象に、彼らの訪問国の中国や中国人に対する意識を明らかにした上で、国際交流プログラムに参加することによって、彼らの中国や中国人に対する意識に変化が見られるかを分析し、国際交流プログラム実施の意義を探ることを目的とする。具体的な研究課題は以下の2つに設定する。

課題1：国際交流プログラムの参加前後において、中国に対する意識に変化が見られるか。

課題2：国際交流プログラムの参加前後において、中国人に対する意識に変化が見られるか。

3. 研究方法

3.1 対象者

本調査の対象者は、関東にある国立大学の日本人大学生48名である。すべて初級の中国語学習者であり、日本の大学と中国の大学の連携で行われた国際交流プログラムに参加した学生であった。国際交流プログラムは中国に2~3週間程度滞在し、中国の大学で中国語の授業、中国の文化体験、中国の大学生との交流活動、または中国の学生の家庭訪問、中国の企業見学、中国の市内観光などの活動が行われた。国際交流プログラムに参加する前と参加した後に対象者48名に対して、中国や中国人に対するイメージについてアンケート調査を行った。

3.2 調査方法

調査紙は御堂岡(1982)と相川(2007)を参考し、「中国」と「中国人」に対するイメージについて調査を行った。「中国」、「中国人」に関する質問項目の回答は「1. とても 2. かなり 3. やや 4. どちらともいえない 5. やや 6. かなり 7. とても」の7段階評価とする。各項目の回答の平均値を項目中間値(4)と比べることで、当該回答の傾向を検討する。また、国際交流プログラム参加前後の意識の変化を探るために、プログラム実施前後に収集した質問紙調査の結果を t 検定^(注4)にかけ、参加前後に意識の変化が見られるかどうかを分析する。

4. 分析の結果

表1は、国際交流プログラムに参加した日本人大学生の中国や中国人に対するイメージが、国際交流プログラム参加前後においてどのように変化したかを示したものである。調査項目の平均値、標準偏差、参加後マイナス参加前の差について t 検定にかけた結果を示している。また、項目後の矢印は変化の方向性を示している。

表1 国際交流に参加した日本人大学生の意識変化

	項目	参加前	参加後	差の検定
		平均値 (標準偏差)	平均値 (標準偏差)	参加後－参加前
中国	1. 好戦的－平和的 (→)	3.38 (1.18)	4.00 (1.41)	0.62*
	2. 現実主義的－理想主義的	3.21 (1.10)	3.39 (1.15)	0.18
	3. 女性的－男性的 (←)	4.77 (1.08)	4.39 (0.69)	-0.38 ⁺
	4. 閉鎖的－開放的	4.23 (1.73)	4.25 (1.16)	0.02
	5. まとまりが悪い－まとまりがよい	4.06 (1.29)	3.64 (1.53)	-0.42
	6. 信用できない－信用できる	3.70 (1.08)	3.42 (1.46)	-0.28
	7. 暗い－明るい	4.75 (1.39)	4.50 (1.38)	-0.25
	8. 追従的－自主的 (←)	5.17 (1.33)	4.44 (1.52)	-0.73*
	9. 遅い－速い	4.68 (1.27)	4.61 (1.25)	-0.07
	10. きたない－きれい	2.88 (1.10)	2.58 (0.69)	-0.30
	11. 年老いた－若い	4.17 (1.21)	4.17 (0.77)	0.00
	12. 独裁的－民主的	3.25 (1.28)	3.44 (1.00)	0.19
	13. 沈滞した－活気に満ちた	5.08 (1.60)	5.19 (1.31)	0.11
	14. 親しみにくい－親しみやすい	4.69 (1.45)	4.78 (1.40)	0.09
中国人	1. 模倣的－独創的	3.81 (1.54)	3.53 (1.18)	-0.28
	2. 好戦的－平和的 (→)	3.71 (1.27)	4.36 (1.59)	0.65*
	3. 不道徳的－道徳的	4.00 (1.22)	4.33 (1.24)	0.33
	4. 閉鎖的－開放的	4.69 (1.46)	4.75 (1.20)	0.06
	5. 信用できない－信用できる	4.21 (1.43)	3.92 (1.46)	-0.29
	6. 冷たい－温かい (→)	4.54 (1.64)	5.56 (1.23)	1.02**
	7. 遅い－速い (←)	4.74 (1.42)	4.28 (1.06)	-0.46 ⁺
	8. 集団主義的－個人主義的 (←)	4.44 (1.47)	3.64 (0.90)	-0.80**
	9. きたない－きれい	3.48 (1.34)	3.64 (1.27)	0.16
	10. 内気－社交的	5.35 (1.18)	5.31 (1.09)	-0.04
	11. 非民主的－民主的	4.15 (1.47)	4.19 (1.17)	0.04
	12. 親しみにくい－親しみやすい (→)	4.88 (1.27)	5.75 (0.94)	0.87**
	13. 不親切－親切 (→)	4.90 (1.52)	5.67 (1.33)	0.77*

(** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$) (注5)

(出所) 筆者作成

4.1 中国に対する意識

(1) 国際交流プログラム参加前

国際交流プログラムに参加する前に、日本人大学生が中国に対して持っているイメージについて、まず、「1. 好戦的－平和的」「12. 独裁的－民主的」「2. 現実主義的－理想主義的」など

の3つの項目の平均値は、それぞれ「3.38」「3.25」「3.21」となっており、「3. 女性的－男性的」の平均値は「4.77」となっていることから、中国に対して、やや好戦的、独裁的、現実主義的、男性的というイメージを持っていることがわかった。それに対して、「7. 暗い－明るい」「13. 沈滞した－活気に満ちた」「9. 遅い－速い」「14. 親しみにくい－親しみやすい」などの4つの項目の平均値は、それぞれ「4.75」「5.08」「4.68」「4.69」となっており、中国に対して、やや活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいというイメージを持っていることがわかった。つまり、中国に対しては、やや硬いイメージを持っている反面、やや明るく親しみやすいというイメージも抱いていることが窺えた。

また、「8. 追隨的－自主的」「10. きたない－きれい」という2項目の平均値は「5.17」「2.88」となっていることから、やや自主的、そしてややきたないというイメージもあることがわかった。その他、「4. 閉鎖的－開放的」「5. まとまりが悪い－まとまりがよい」「6. 信用できない－信用できる」「11. 年老いた－若い」などの4つの項目はの平均値(それぞれ4.23, 4.06, 3.70, 4.17)は4に近いことから、どちらともいえないという態度を持っていることがわかった。

以上をまとめると、日本人大学生は中国に対して、やや好戦的、男性的、独裁的、現実主義的などやや硬いイメージを持っている反面、活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいというイメージも抱いているように、2つの側面から中国を捉えていることが示された。

(2) 国際交流プログラム参加後

表1からわかるように、中国に対するイメージに関して、国際交流プログラム参加前後の意識に変化が見られた項目と見られなかった項目があることが示された。まず、中国に対するイメージについて、変化が見られた項目を見てみると、「1. 好戦的－平和的」、「8. 追隨的－自主的」と「3. 女性的－男性的」の3項目は、統計上有意な変化が確認された。

この3項目を詳しく見ると、「1. 好戦的－平和的」の回答平均値は、「3.38」から「4.00」に上がり、有意な変化($t=-2.15$, $p<.05$)が確認されたことから、中国に対するイメージはやや好戦的から中立的な態度に変わったことがわかる。そして、「3. 女性的－男性的」の回答平均値は「4.77」から「4.39」に下がり、10%水準で有意な変化($t=1.97$, $p<.10$)が見られたことから、中国に対してやや男性的というイメージは中立的な態度に変化した傾向があることがわかった。また、「8. 追隨的－自主的」の回答平均値は「5.17」から「4.44」に下がり、有意な差($t=2.27$, $p<.05$)が見られたことから、中国についてやや自主的というイメージから中立に近い態度になったことも見られた。

国際交流プログラムに参加する前の意識の特徴として、中国に対してやや活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいというイメージを持っている一方、やや好戦的、独裁的、現実主義的、男性的という硬いイメージも持っており、同時に2つの側面のイメージを持っている傾向が見られた。

国際交流プログラム参加後の意識も、同じく2つの側面のイメージが同時に存在しており、やや活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいという一面のイメージ、そして、やや硬いという一面のイメージの中の現実主義的で独裁的という部分のイメージは変化していなかったことがわかった。しかし、やや硬いという一面のイメージの中のやや好戦的で男性的という部分

のイメージは、中立的なイメージに変化していることが示された。つまり、国際交流プログラムに参加することによって、中国に対するイメージの中、やや硬いという一面のイメージの一部は中立的になってきたことが示された。

4.2 中国人に対する意識

(1) 国際交流プログラム参加前

国際交流プログラム参加前の中国人に対するイメージについては、「4. 閉鎖的－開放的」「6. 冷たい－暖かい」「7. 遅い－速い」「10. 内気－社交的」「12. 親しみにくい－親しみやすい」「13. 不親切－親切」という6つの項目の平均値は、それぞれ「4.69」「4.54」「4.74」「5.35」「4.88」「4.90」と高く5に近いことから、中国人に対しては、やや社交的で開放的、そして速く、親切で暖かく親しみやすいというイメージを持っていることがわかった。また、「9. きたない－きれい」の平均値(3.48)の傾向から、やや中立の4に近いが、ややきたないというイメージもあることがわかった。

その他、「1. 模倣的－独創的」「2. 好戦的－平和的」「3. 不道徳的－道徳的」「5. 信用できない－信用できる」「11. 非民主的－民主的」「8. 集団主義的－個人主義的」などの6つの項目の平均値(それぞれ3.81, 3.71, 4.00, 4.21, 4.15, 4.44)は4に近いことから、これらの項目について中立的なイメージを持っていることがわかった。

以上をまとめると、中国人に対してややきたないというイメージがあるが、それ以外に、マイナスなイメージはほぼ見られず、主に社交的で開放的、そして親切で暖かく親しみやすいなど、オープンで接しやすいというプラスなイメージを抱えていることが示された。

(2) 国際交流プログラム参加後

国際交流プログラム参加後の中国人に対するイメージに関しては、「2. 好戦的－平和的」「6. 冷たい－暖かい」「8. 集団主義的－個人主義的」「12. 親しみにくい－親しみやすい」「13. 不親切－親切」「7. 遅い－速い」などの6つの項目は、統計上有意な変化が確認された。

詳しく見ると、まず、「12. 親しみにくい－親しみやすい」($t=-3.64, p<.01$)、「13. 不親切－親切」($t=-2.47, p<.05$)、「6. 冷たい－温かい」($t=-3.24, p<.01$)の3項目の回答平均値は、国際交流プログラム参加前にも「4.5」を超えており、やや親切で温かく親しみやすいというイメージを持っていたが、国際交流プログラム参加後、3つの項目の回答平均値はすべて「5.5」を超えるようになって、かなり親切で温かく親しみやすいと思うようになったことが示された。

また、「7. 遅い－速い」の回答平均値は「4.74」から「4.28」に下がり10%水準で有意な変化($t=1.72, p<.10$)が見られたため、中国に対してやや速いというイメージから中立的なイメージに変わったことがわかった。

「2. 好戦的－平和的」($t=-2.03, p<.05$)と「8. 集団主義的－個人主義的」($t=3.07, p<.01$)の回答平均値は、国際交流プログラムの参加前後ともに中間値に近い数値となっているものの、参加前後の項目の間には有意な差が確認されたため、中国に対しては、やや好戦的寄りからやや平和的寄りへと、またやや個人主義的寄りからやや集団主義的寄りへと変化したこ

とが示された。

国際交流プログラム参加前、中国人に対するイメージとして、やや社交的で開放的、そしてやや速く、親切で温かく親しみやすいという肯定的なイメージを抱いている傾向が見られた。国際交流プログラム参加後、このイメージの中、やや社交的で開放的なイメージは変化しておらず、やや親切で温かく親しみやすいというイメージはさらに強まり、つまり、中国人に対してかなり親切で温かく親しみやすいというイメージを持つようになったことが示された。また、やや速いというイメージから中立的なイメージに変わったことがわかった。さらに、好戦的や個人主義的寄りの傾向から、やや平和的で集団主義的というイメージに変化したことも窺えた。

5. 考察

本研究の結果から、国際交流プログラム参加前後において、日本人大学生の中国や中国人に対する意識に変化があることが示された。このような意識の変化はどのようにもたらされたのだろうか。この変化は国際交流に参加することによるものだと確定できないが、参加者の日本人大学生の書いた振り返りレポートから見ると、実際に中国に行ってみて現地の人々と接することで、自分達の意識が変容していることが語られている。

振り返りレポートの内容を見てみると、多くの日本人大学生は中国に行く前に、日本にいなから書籍、ネットやテレビ、マスメディアから中国に関する情報を得て判断しているため、中国・中国人に対しては、あまり良い印象を抱いておらず、中国人は日本人に対して反日感情を抱いていて自己中心的な性格であり、一様に性格が柔らかくなくなさそうだという固定観念を持っていたことが示された。しかし、実際に国際交流プログラムに参加して中国に行ってみると、「日々中国人の温かさを感じました」、「町の人や店員さんとコミュニケーションをとるようになると、彼らの中にある優しさ、人間としての温かさに気づき始めて、心から接してくれていたのだと思います」、または「中国人の学生達とたくさんの交流ができて本当に良かった。彼らは私たちに対して本当に親切にしてくれました」、「中国人は日本人よりも情に厚く、温かいと思った。これは、交流した学生に関する話だけではなく、街でもどこでもそうであった」と述べているように、国際交流プログラムに参加して、現地の人々と交流したりしながら生活を続けていく中で、それは単なる自分の偏見にすぎないということを実感し、中国や中国人に対する印象が大きく変容したことが窺えた。

また、「報道の怖さを認識するとともに、現地での交流の重要性を再確認した」、「マスコミなどの情報に流されない耳と目を持ち中国を見つめていかなければならないと感じました」、「自分の固執した考えを見直す機会が多く与えられた」、「今回の経験を無駄にせず、引き続き中国語と中国について勉強し『百聞は一見にしかず』という教訓を胸に生活したいと思います」と述べているように、報道やマスコミからの情報に流されず、実際に現地に行つて身をもって体験することの大切さを訴えている日本人学生も多かった。

さらに、国際交流プログラムに参加したのがきっかけで、中国語をもっと勉強したい、中国に長期留学に行きたい、または将来中国語に関わる仕事をしたい、将来東アジアに貢献する仕事をしたいと考えるようになった人が多かった。例えば、「『中国に対して日本人は偏見を持つ

ている。本当はこんなに素晴らしい国だ。』と帰国してから多くの人に話したけど、なかなか言葉では理解してもらえなかったのが悔しかった。『本当の中国の良さ』を日本人に少しでも多く知ってもらえるような仕事を将来したいと思うようになった。」と述べているように、本当の中国の姿を周りの人たちに伝えたい、そしてそのための仕事をしたいとまで考えていることが読み取れた。

このように、国際交流プログラムに参加した日本人大学生は、みんな中国に行く前に日本のマスコミなどの報道からの影響を受けて、中国や中国人に対するイメージを生成していたが、そのイメージの中に先入観・固定観念なども含まれていると言わざるを得ない。ところが、実際に中国に行って現地の人々と触れ合う中で、中国の本当の姿を肌で感じる事ができて、中国・中国人に対する理解が変容していったことがわかる。そして、この国際交流プログラムへの参加を通して、中国・中国人に対する意識が変容したことに留まらず、自分の目で確かめて判断することの必要性、中国に関する仕事をしたいなど自分の人生の方向性を定めるきっかけになったことが窺えた。

こうした記述と本研究の結果を合わせて考察すると、まず、中国に対するイメージについては、国際交流プログラム参加前、中国に対してやや活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいというイメージを抱えていると同時に、やや好戦的、男性的、独裁的、現実主義的という硬いイメージも抱えていることがわかった。国際交流プログラム参加後、やや活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいというイメージは変化が見られず、やや硬いイメージのやや好戦的で男性的という部分では中立的に変化したことがわかった。そのうち、やや活気に満ちて明るく速く、やや親しみやすいというイメージについては、中国に行く前にもともと中国に対してこういう肯定的なイメージを持っていたが、実際に国際交流プログラムに参加して現地に行っても、こうした肯定的なイメージは変化しておらず、そのままの印象を保持していたことが窺える。また、やや好戦的で男性的というイメージが中立的になったのは、実際に中国に行ってみて現地の人々と触れ合う中で、国全体に対する印象が少し変わりイメージが少し柔らかくなってきたことが考えられる。なお、中国に対してやや硬いイメージのやや独裁的、現実主義的というイメージは変化が見られなかった。これらのイメージは政治や主義主張に関することが多く、短期間の交流活動で国家や政治に対するイメージは変化しにくいものと思われる。

次に、中国人に対するイメージについては、国際交流プログラム参加前、やや社交的で開放的、そしてやや速く、親切で温かく親しみやすいというイメージを抱いていることがわかった。国際交流プログラム参加後、やや社交的で開放的というイメージは変化しておらず、やや速いというイメージは中立的に変化し、やや親切で温かく親しみやすいというイメージはさらに強まる傾向にあることがわかった。つまり、もともと中国人に対して、やや社交的で開放的、そしてやや速く、親切で温かく親しみやすいという肯定的なイメージを持っていたが、実際に交流活動に参加しても、やや社交的で開放的というイメージは変化しておらず、現地の人々と触れ合う中で温かさを感じて、親切で温かく親しみやすいというイメージがさらに強まったことが考えられる。また、中国人に対してやや好戦的で個人主義的というイメージから、やや平和的で集団主義的というイメージに変化したことから、中国人に対して自己主張が強く協調性がないと考え、やや否定的なイメージも抱いていたことが読み取れるが、実際に現地で様々な

人と接する中で、こうしたイメージは少し柔らかくなって、中立的になってきたことが考えられる。

全体的に、国際交流プログラムに参加した日本人大学生は、参加前に中国や中国人に対して肯定的なイメージを抱いていると同時に、やや硬く否定的なイメージも抱いていたが、国際交流プログラムに参加することで、硬い一面のイメージは柔らかいイメージへと変化し、肯定的に変化していることが示された。そして、中国に対するイメージと比べて、中国人に対するイメージにおいて多くの変化が見られた。その理由として、国際交流活動はまず現地の人々と交流することで始まるので、現地の人々に対するイメージが一番生成しやすいためと思われる。現地の人々との交流や現地の人々に対するイメージが生成された上で、国という抽象的なイメージが形成されるためと考えられる。

6. まとめ

本研究では、国際交流プログラムに参加した日本人大学生を対象に、国際交流プログラム参加前後に訪問国の中国・中国人に対してどのような意識を持っているのか、そして国際交流プログラムに参加したことを通してどのような変化が見られるかを分析した。その結果、国際交流プログラムに参加する前に、中国に対してやや明るく親しみやすいという側面と、やや好戦的で男性的という側面のイメージを抱いており、中国人に対してやや社会的で開放的、そしてやや親切で親しみやすいというイメージを抱いている傾向が見られた。一方、国際交流プログラムに参加した後に、中国に対するイメージの中、やや好戦的で男性的という硬い一面のイメージが中立的になっており、また、中国人に対するやや親切で親しみやすいというイメージがさらに強まり、かなり親切で親しみやすいというイメージに変化したことが示された。日本人大学生が書いた振り返りレポートを見ると、実際に訪問国の中国に行って現地の人々と交流したりしながら生活を続けていく中で、中国に対して持っていた考えは単なる自分の偏見にすぎないということを実感し、自分の固執した考えを見直す機会が多く与えられ、現地での交流の重要性を再確認したと述べているように、訪問国の中国・中国人に対する意識が大きく変容したことが窺えた。

本研究では、国際交流プログラムの参加前後に、日本人大学生の訪問国に対する意識にどのような変化があるかを調べて、振り返りレポートを参考して考察を行ったが、今後さらに厳密に調べるために、国際交流プログラムの参加群と非参加群を設定し、国際交流プログラムへの参加が意識変容に与える影響を分析することが必要だと考える。さらに、今後、参加者が書いた振り返りレポートを詳細に分析し、国際交流プログラムへの参加を通してどのような学びが得られたかを分析し、国際交流プログラムの意義を具体的に探ることが必要だと考える。

注

- (注 1) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1345878.htm 「日本人の海外留学者数（平成 26 年度）」の結果を参照されたい。
- (注 2) PAC (Personal Attitude Construct) 分析調査は、個人ごとに意識構造を分析する個人別態度構造分析の手法である。調査手順として、刺激文を調査対象者に与え、思いつくイメージをパソコンで入力してもらい、2つの項目の組み合わせすべてについての類似度を7段階尺度で評定してもらい、その回答をもとに全項目間の類似度距離行列を測定し、クラスター分析を行う。その結果をデンドログラムで示しながら対象者に再度インタビューを行い、各クラスターに対するイメージを語ってもらう。
- (注 3) SD (Semantic Differential) 尺度は、事象の一般的な意味次元を測るための測定法であり、心理学的な実験でよく用いられる。「好き-嫌い」などの形容詞対からなる評価尺度を複数用いて評価を行う。
- (注 4) t 検定は帰無仮説が正しいと仮定した場合に、統計量が t 分布に従うことを利用する統計学的検定法の総称である。2組の標本について平均に有意差があるかどうかの検定などに用いられる。
- (注 5) p 値は2群に差がない確率を表す。 $p <$ 有意水準の場合は有意差があるとみなされる。

参考文献

- 相川充 (2007) 「高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果」『東京学芸大学紀要』58, pp. 81~89
- 御堂岡潔 (1982) 「修学旅行によるイメージの変化」辻村明ほか編『日本と韓国の文化摩擦-日韓コミュニケーションギャップの研究』出光書店, pp. 44~56
- 山田智久(2011a)「国際交流に対する大学生の意識調査-PAC分析調査の結果を中心に」『佐賀大学留学生センター紀要』10, pp. 29~40
- 山田智久 (2011b) 「国際交流に対する日本人大学生の意識変化：PAC分析調査の結果から」『日本教育心理学会総会発表論文集』53, pp. 192